

『ある行旅死亡人の物語』を読む

写真のノンフィクションを一気に読んだ。読みはじめたら、やめられない本だった。表紙カバー裏から。2020年4月。兵庫県尼崎市のとあるアパートで、女性が孤独死—現金3400万円、星型マークのペンダント、数十枚の写真、珍しい姓を刻んだ印鑑……。記者二人が、残されたわずかな手がかりをもとに、警察も探偵も解明できなかった身元調査に乗り出す。舞台は尼崎から広島へ。たどり着いた地で記者たちが見つけた「チヅコさん」の真実とは? 「行旅死亡人」が本当の名前と半生を取り戻すまでを描いた圧迫的ノンフィクション。



行旅死亡人(こうりょしぼうにん)とは、病気や行き倒れ、自殺等で亡くなり、名前や住所など身元が判明せず、引き取り人不明の死者を表す法律用語。行旅病人及行旅死亡人取扱法により、死亡場所を管轄する自治体が火葬。死亡人の身体的特徴や発見時の状況、所持品などを官報に公告し、引き取り手を待つ。

あとがきから。現代において、高齢者の孤独死や無縁死は珍しくない現象である。その数は年間3万人に上ると推計されており、今後増加することはあっても減少することはないだろう。なお、行旅死亡人は年間600~700人ほどが官報に掲載されている。

千津子さんもそうした死者の一人だった。誰にも看取られずひっそりと亡くなり、無名の「行き倒れ」として火葬された。目をこらすと不可解なことの多い「事件」だったが、遠目に見れば、今や誰の人生にも起こりうる出来事である。そのためか、彼女の影を必死で追いながら、しばしば自分が死ぬときのことを考えた。誰かがそばにいてくれるだろうか。死後、自分のことを思い出してくれる人はどれぐらいいるだろうか。

誰かの死を取材するのは記者としての日常ではあるが、やはりどこか遠い話でしかなく、日々の仕事として通り過ぎる過程に、自分の死を想像する余白はほとんど残されていない。けれども今回、千津子さんの部屋のベビーベッドに残されたぬいぐるみの姿を目にしたとき、理屈抜きに、抗うことのできない時間の流れと、自分にも必ず訪れる「終焉」の空気を、肌で感じた。「人はいつか」ではなく、「私はいつか」必ず死ぬのである。それでも人は生きているだけで、どこかにその足跡を残す。それもこの取材で痛感させられたことのひとつだ。いや、死後でさえも人は、何かを残しうるのかもしれない。一人の死が二人の記者を、それから数多くの人々を突き動かして、こうして一冊の本まで生んでしまったのだから。

共同通信大阪社会部の二人の記者によるノンフィクションから、人それぞれの人生の足跡について考えさせられた。私もいつか必ず死ぬことについても。

(2023年2月14日)